

## 第2章 生活綴方理論の成立

## 第1節 大正自由教育運動の展開

## 1. 新しい教師像の形成

上田庄三郎は、1914(大正3)年3月、高知師範学校第一部を卒業、高知県幡多郡三崎尋常高等小学校の教壇にたった。高知師範在学中に、オイケン、ベルグソンなどの生命哲学、トルストイの人道主義文学、ルソーの自然主義教育論、あるいは社会主義に関する文献をむさぼり読んだと語る人がある。<sup>(1)</sup> 明治後期からのデモクラシーの潮流—明治絶対主義体制の内部をゆさぶった個人主義思想—を真正面から受けとめようとしていたのであった。また彼の回想によると、師範の同級生数名と文学同人を結成、同人・黒岩正一より石川啄木について手ほどきを受け、上田は啄木に心酔するようにならなる。後年、啄木論について著書を発表するが、啄木のいわゆる「日本一の代用教員」の主張が、上田の教壇に立つにあたっての心がまえとなっていたといってもおおげさではない。彼は「青年教師としての可能な啄木精神への肉迫が、ただちにわたしの教師としての実践生活であった」と書き残している。<sup>(2)</sup>

大正新教育運動の胎動は、早くも明治30年代に始まっていた。すなわち、明治32年の樋口勘次郎著『統合主義新教授法』を先駆とし、多くの講壇教育学者による外国の新教育思想の紹介が相つぎ、大正に入る頃明石師範附属小学校における及川平治の動的教育学の実践を画期とし、西山哲次(帝国小学校)、中村春二(成蹊実務学校)、沢柳政太郎(成城小学校)などによる私立学校の設立、木下竹次(奈良女高師附小)、手塚岸衛(千葉師範附小)などによる附属学校での新教育の実験などがつぎつぎと展開された。

この動向が上田の初期の教育実践にどう影響していたかはつまびらかではない。ただ、前述のように、デモクラシー思潮を真摯に受けとめていたという事実が、上田がいかにか時代の動きを見る目の鋭い人であったかを、ものがたっているだろう。一部には、鈴木三重吉『赤い鳥』創刊のころには、すでに、新教育の研究会を同僚と共に開いていたと語り伝えられている。<sup>(3)</sup> たしかに、資料の残されている大正9年以降をみると、たとえば、1920(大正9)年には同志とともに八大教育思潮の一つ、創造教育論の稲毛金七の講演会を幡多郡内において成功させているし、1921年には北原白秋、山本 鼎、片上伸らの日本自由教育協会と密接な連絡をとり、協会の機関誌『芸術・自由教育』の熱心な支持者になっている。また、1924年初頭には20日余りの日数をかけて新教育視察に出かけ、千葉師範附小の自由教育実践を参観している。その他、小原国芳の全人教育論、下中弥三郎の万人労働の教育論などにも、大きく影響をうけている。こうした上田の足どりを見ていると、彼が師範教育でうけた「教師主導」「教材絶対」の教育実践理論を反古とし、「児童をいかに」教育、新教育のいわゆる児童中心主義教育を懸命に模索してい

たことがわらう。ただ、彼において「児童を生かす」とは、教師の教育活動を放棄することではない。上田は児童の学習意欲が喚起されるよう、自由な個性の展開に待つべきである、とした。教師は学習の「協働者」なのである。(4) このような、あるべき教師像は、従来の「教権型」ではない。上田は「児童の自由を尊敬しやうとするには、教育者は自ら自由人でなければならぬ」と述べているが、大正デモクラシーの潮流にのり「児童解放」「童心至上」を主張し実践していても、かんじんの教師自身が旧態然たる教育界にがんじがらめになっていたのではどうにもならない。(5) まず、教師みずからを教育界あるいは社会全体の封建的、官僚的な因襲や伝統から解きほなさなければならない、というのである。こうした個の解放の論理こそは、単に上田庄三郎個人にとどまらず、当時の青年教師たちの間に盛んに支持されたのであった。全国的に、青年教師たちの教育研究サークルや文芸サークルが結成されていたのは、おおよそ、ここに見るような事情によっていた。(6)

一方、時あたかも、第一次世界大戦後の恐慌、昭和期へともちこされていく連続的不景気に見まわれ、「天職」の教育界にも、具体的な生活難一給与不払、遅配、減俸などがおそいかかっていた。こうした中で他の労働界で生活難解消を求めて労働者の組織化が進んでいく。いわゆる、労働運動の台頭を見るようになって、教育界に於いても、さきの青年教師の研究サークルなども旧思想を「攻撃」し、自己確立をめざすばかりでなく、生活難解消などを求めるようになる。このように、教師が生活権に目覚め、労働者階級としてみずからを組織化してゆくのは、大正期における教育界の一つの特徴である。たとえば、1919年には埼玉県で下中弥三郎を中心とした啓明会が結成されている。啓明会は結成の翌年「教員組合啓明会」と改称し、第一回のメーデーに、主催団体の一員として参加している。

高知県土佐に、上田庄三郎らを中心として結成された闡明会も、教師の自己確立の動き、生活権の自覚という性格をもった教員組織である。さらに、会員の一部がさきの啓明会の地方会員として加盟していつている。(7) 結成の時期は不詳であるが、遅くとも1918年にはその動きがあったということであり、翌年には綱領・規約を採択している。(8) のちに部分的に手なおしが行われたと推察されるが、基本的には特に会長を置かない、入退会自由な、「人格的」集団であった。その活動は、会員の要求に基づき、研究会を会内外で行ったり、渭南教育会（帝国教育会の末端機構）の席上で「待遇」改善や「新しい教育」についての宣伝をしたり、その実現を旨とした実践を公開したりしている。このような意味から、闡明会はデモクラシー的風潮によって生まれた「教育の近代化」「教育改造」運動の組織体であり、生活権への自覚もめばえていたと評することができよう。この点で、上田庄三郎が昭和に入ってから、教員組合運動を進めていく上で教師の「教育権」「生活権」を基本とし、その上に教師の「自治権」の確立をめざしていくべきだとして「教育は教育するもの手に」の論陣を張っているが、それはすでに大正期の教育運動をすすめていく中に端初的にみられた姿勢であったといってもよいだろう。(9)

闡明会員たちは、デモクラシー的風潮を、「時代の大勢」と捉え、旧態然たる立場を「頑冥思想」ときめつけた。その主張の中には、デモクラシーは「民本主義」（吉野作造）ではなく

「民主主義」だという、今日からみても驚くほどの進歩性を見せているものがある。<sup>(10)</sup> しかも、彼らは「たとえ正当な主張要求も少ない力では蹂躩されるから、蹂躩されないだけの力を成すために団結である」と、組織化の必然性をも提唱している。<sup>(11)</sup>ところが、ここでいう団結は規約にみられるように「入退会は人格的自由」を指しているところからみて、「人格的結合」にすぎず、組織原則を明確にする努力はなされておらず、社会のしくみについての認識の不十分さが、ここにはみられたのである。このことは、会が当局により弾圧政策がとられ会員のほとんどが日常的に会合も出来ないようなところへ文字通り「四散」させられてしまったあと、その弾圧の直接の責任者である一視学が急死したりすることによって、会の組織としての活動が、目にみえておとろえていっていることに、端的に現われてきている。ただ、組織体として教師集団が要求をもって活動することに未熟であった当時の歴史性、社会的基盤のなかで、闡明会「四散」にたいする自己保身のために機関誌の発刊が提唱され、それを維持していかうとした会員の情熱は、評価されてしかるべきであろう。

すなわち、1919年3月の定期人事移動の際、会員20数名の殆んどが、山間僻地、離島などといった極めて交通不便な各地域に不意転の形で転校させられた。<sup>(12)</sup> それに対して上田庄三郎は「精神的」に会員をつなぎとめようという目的で機関誌『闡明』の発行を提唱、みずからその編集の中心の任にあたった。機関誌発行のために、一号発行につき10銭の会費が徴収された。機関誌上には、後にも見るように、会員たちのデモクラシー的潮流につきあげられた熱情が論文や文学作品（随想、短歌など）にこめられて発表されている。<sup>(13)</sup> 『闡明』は、1920年6月創刊。当初月刊で発刊されていく予定であったが、主幹上田庄三郎の病気、編集協力者西山順一の転任、さらに上田の転任などの編集者側の事情ばかりではなく、「三〇数名の会員中毎月投稿する者は僅に五・六しかない。それを編輯主任は自分の原稿と他の原稿の謄写に印刷して製本」と来ては殆ど献身的でなければ成就されない」と一会員が警告をしていることにみるように、会員自身の主体の問題がある。<sup>(14)</sup> そこには左遷されたことによって、当局側との妥協に応じ一日も早く都会地への転入を望む会員が生じてきたという事情、或いはさきに述べたように、弾圧の直接の責任者であった或る視学が急死したことによって会活動をそれへの「攻撃」を直接の目的としていた会員たちは、「頑冥思想の撲滅」とは自分自身にかえてくるコトバだともて発言するようになったという事情等があったことが指摘されるだろう。<sup>(15)</sup> 結局、1921年6月、上田は編集後記に「もうこれっきり出すことが出来ないかも知れません。」と結んで、第8号で廃刊した。

闡明会の活動の特徴は何か。換言すれば、教師が組織をもって活動するという教員史において先駆的な性格の具体的な中味はなにだったのだろうか。その一は、自らがどれ程そうであったのかということには疑問があるけれども、少なくとも教員組合運動の芽生えの時期にあって、その動向が敏感に反映されている、ということである。会員たちは、「正当な主張要求の貫徹」のために組織化の必要性を自覚した。その正当な「主張要求」とはなにだったのか。たとえば、ある会員が、「郡教育ヲ発展セシムル方法如何」という論文を発表しているが、それによると、「教育者側ノ考察」「管理者ト教育者」「児童側ノ観察」「社会側ノ観察」「設備」「保護者又ハ其

家族「教科書改善」についての検討が加えられており、そこでは給料や住宅、超過勤務、娯楽など待遇改善の要求が提出されているほか、言論、集会の自由、人権の確立、教育関係の施設設備の改善、あるいは拡充、教育費完全国庫負担などの要求をも出し、また、国定教科書批判を試みている。こうした論稿の背景に、教師自らの権利（教育権、生活権）獲得に対する自覚があることは勿論であるが、学習者である児童が経済的貧困によって就学がさまたげられていることに対する教育的良心もまたのぞかれる。<sup>(16)</sup>ただ前述のように会そのものが「人格的結合」という性格をもって来たために、<sup>(17)</sup>これ等の主張もスローガンのであって、少なくとも運動としてどう取り組み、実践させていくかという運動論は具体的に提起されていない。たとえば上田庄三郎などは、時代を階級斗争の時代相とは見定めてはいるものの「決して現実の争闘をそのまま讚美するものではなく」、真実の闘いを「現実的自我と理想的自我との戦いである。自己超越のための自我創造のための戦、どこまでも自己熱愛のための人格的斗争でなければならない」としている。そして、この徹底した個人主義的立場をつらぬいて、階級斗争をではなく、「敵も味方も勝者も敗者も共に生き、かくの如き戦（注、上田の言う「真の戦」）ののちには、新しきより善き時代が招致される」ことをめざした「真の戦」に取り組もうとした。<sup>(18)</sup>会の底流にあったものはこの上田の発言にみられるような近代の自我論＝個人主義思想とみなすことが出来よう。このようなところから、運動体としての具体的な活動は殆んど見られず、会員による「個性の苦闘」、たとえば「校長泣かせ」「視学泣かせ」という言葉でいわれたように、権力に対して個々人が理論斗争をしむけていく、というところに終わっている。<sup>(19)</sup>この点で、会は『闡明』誌などで共感の輪を拡げることは出来ても、教育運動としての発展を望むことは出来なかったといえよう。

その二は、さきの事と密接にかかわることであるが、闡明会のおこした教育運動が青年教師を刺激し、いくつかの地域において教員サークルを誕生せしめていることが指摘されよう。それは、1920年3月の左遷人事が一つの契機となっている。すなわち、闡明会会員は散りゆく地で教員の結集をはかり教育改造運動を起こそうと試みた。たとえば同年5月、幡多郡養老において官製教育会の保守性、反動性に真向から対立し、教育改造の運動を起こそうとしたこと、<sup>(20)</sup>また同じ月に池田某が幡多郡坂東で平凡という同志会を結成したこと、<sup>(21)</sup>が報告されている。また有力な一会員横山才一は、新しい任地幡多郡弘見小学校を中心として教員組織新生会を同志と共に結成（1920年6月頃）、機関誌『鳥瞰』を発刊した（同年9月）。『鳥瞰』誌には闡明会会員上田庄三郎、下谷春吉らの投稿が見られる他、1921年4月に創設準備の始まっていた小砂丘忠義、中島喜久夫、吉良信之らのSNK協会という教員組織（高岡郡、機関誌『極北』）と横山才一らが連絡をとり合っていたことが知れる。<sup>(22)</sup>『鳥瞰』誌はほぼ『闡明』誌と同質の理論や思想性をもっていた。また、『闡明』誌には幡多郡内ばかりでなく高知県外からの投書があったが、九州大分からの投稿主、清原駿一郎（本名・清原清春）が闡明会の活動に刺激されて、研覈会という教員組織の結成に努めている。彼によって闡明会が中央（稲毛金七主宰『創造』）に紹介されたが、清原の意図は「（全国教員組合あるいは国際的教員組織の結成の動向にあわせて）同じ歩調で進むのでなければならないと思います。ひいては全国の教員が握手して真実の道に突き進むの

でなければならぬと思います。」<sup>(23)</sup> というところにあり、極めて先進的なものであった。この清原の言葉に待つまでもなく、闡明会の一部が、中央の啓明会に参加していったことは、すでに述べておいた。

だが、こうした動向も、教員組合運動の経験が未熟な時代にあっては組合運動としての発展をせず、むしろ「変質」をしていったこともやむを得ない。上田庄三郎はその「変質」を文芸雑誌の経営に向けたのであった。さきに述べたように、上田は、視学の死によって「攻撃」の目標を失した。それまで彼は闡明会活動を「自我宣伝」の場と位置づけていたにもかかわらず<sup>(24)</sup>、その結果「自我鑑賞」というコトバで象徴される「自己改造」「自己創造」の動向を見せるようになる。<sup>(25)</sup> それが『土』という文芸同人雑誌の経営に彼をむかわしめるもっとも大きな理由であった。たしかに彼の論稿は、徳弘視学の死後、自己を内省するものが目立ちはじめている。『闡明』が教師の教育権・生活権を要求し実現させる性格をもっていたとするならば、「自我鑑賞」思想でもってそれに充分こたえることが出来ないことは推察にかたくない。彼は明確に『闡明』誌編集への情熱を失していく。そして『闡明』誌に代わる「教育」誌の発刊を望んだが、それが『闡明』廃刊の翌月、1921年7月に創刊された『土』であった。<sup>(26)</sup> 上田は『土』誌編集に情熱を傾け、1923年9月までに12号を発行している。『土』同人でもあり、上田の夫人でもある鶴恵氏の話によれば『土』誌発行は、1925年春の上京まで続けられていたということである。彼は『土』によって、「自我観照の自由郷に行こう」とするものであった。そうすることによって「ごまかしのない、かけねのない本然正味の庄三郎を引き出したい」と願うのである。<sup>(27)</sup> この雑誌には、彼は、文芸作品のほか、自由教育論を展開している。あわせて、後述のようにこの頃から優れた自由教育実践をくりひろげはじめていることを考えてみれば、「闡明会」という教員組合的運動に対する限界を感じはじめた上田はじめ青年教師たちは、先ず自分自身の思想確立を求め、日々の教育実践のなかにこそ当面の教育運動の課題を見出したと考えることが出来る。

とはいうものの、闡明会が「頑冥思想」に対抗して闡明しようとした「青年教育者の輿論」とは、まさしく大正デモクラシーの潮流下に展開された「新教育」論、「自由教育」論であった。すなわち、闡明会の先駆的性格の第三に“自由教育”運動を切り開き、やがて幡多郡という地に定着させていったという事が指摘されるだろう。このことは本稿の始めに若干ふれておいたことである。その中で、創造教育論者・稲毛金七の講演会を三崎下川口聯合教育会と共催したことは特筆されるべきことである。<sup>(28)</sup> 講演会は「創造本位の教育観」と題して、1920年8月2日から6日まで、1日4時間凡て20時間、幡多郡三崎小学校で開催された。闡明会と稲毛詔風(金七)とがどういつながりがあって講演会をもつに至ったのか、詳細は不明である。ただ、九州・大分の投稿家・清原駿一郎が、稲毛の主宰する雑誌『創造』に「上田君を呼びかけに少しばかり」闡明会について紹介記事を投稿していること、<sup>(29)</sup> および当時、稲毛が創造教育論をもって全国遊説をしてきたことが、直接間接にかかわっていたであろうと推察される。「教育学術講習会」は「真摯な同志特に若き教育者の自由な集り」という主催者、とりわけ闡明会側の心づもりで、「吾ら当然の仕事」として開催された。<sup>(30)</sup> 青年教師たちは、稲毛の土佐入りを「あこがれの日・

待ちつづけた日は遂に来た」と胸高ならせて迎えた<sup>(31)</sup>。そして、「しみじみと恋人の顔を見るように」稲毛の講演に聴き入り<sup>(32)</sup>、彼の言うことを「一言半句も真理でないものはない」と信じたのである。<sup>(33)</sup>ある青年教師は「余は現在真理則稲毛則神くらいに考えているかも知れない」とさえ独白している<sup>(34)</sup>。しかし、闡明会主催の講演会に刺激されて開かれた幡多郡主催の稲毛講演会（8月7日より5日間、中村町にて）では、稲毛をして、「私は今迄随分方々の講習会へ呼ばれて行ったが、此処位侮辱を感じたことは未だ無かつた」となげかじめたほどで、主催者が物の不備、聴講者の不熱心さは目にあまるものがあったという。後者は明らかに「教員研修」という強制から聴講者側に受講態度のあいまいさがあったこと、および主催者側に開講の明確な目的意識の欠如していたことに、講師をして激怒せしめた一因があるろう。稲毛は一会員に対して「君等が反抗する理由がはじめて今日わかった」といい、さらに「こんな様子では益々君等の仕事が骨が折れるぞ」と激励ともつかないコトバを投げたという<sup>(26)</sup>。このコトバの中に当時の幡多郡における教育界の大勢がわかるだろう。

稲毛の講習会の波紋は当局側をしますます新教育に対してかたくなな姿勢をとらしめたが、一方で、青年教師たちには深く迎え入れられた。さきの新生会では機関誌『鳥瞰』において稲毛講演特集をくんでいるし、『闡明』誌にはしばらくの間、稲毛賛美の論稿が展開されていく。上田庄三郎自身もまた強い影響を受け、講習会を題材にした小説「夏」を『土』誌に発表、1925年9月に開校した雲雀ヶ岡小学校の教育主題を「創造本位の教育」とした。

むろん、稲毛の教育哲学のみの新教育理論を受け入れ、実践化したのではない。『闡明』誌には、その他『芸術自由教育』『教育問題研究』などの紹介がみられるばかりでなく、明らかにそれらとの連絡を密接にとうとうとしていたことが伺われるのである。これらが相補的に青年教師たちの内面に働きかけ、自由教育論や自由教育実践を形成するという「自由教育運動」の展開となっていったのである。そして、この事は、単に闡明会活動期にその開拓がなされたのみならず、闡明会以降の活動の中に持ち込まれていった、ということができよう。この「自由教育」とは「新しい児童像」研究が展開されたことにはかならないが、そのことについては次項において詳しく述べたい。

#### 〔本文註解〕

- (1) 山崎茂雄 “上田庄三郎君を偲んで”（『土佐清水市教育文化協会会報』第9号、1959年）
- (2) 上田庄三郎 “私の文学教師時代”（『新教師論』1938年 啓文社）  
なお、上田庄三郎の啄木論には、およそ次のようなものがある。
  - 青年教師啄木（1936）
  - 情熱の青年教師石川啄木（1948）
  - 青年教師石川啄木（1955）
- (3) 西村政英『魂をゆさぶる教育—青年教師・上田庄三郎』（1973年、風媒社）

- (4) たとえば、『大正13年益野小学校学校経営案』にくわしい。本章次項を参照されたい
- (5) 上田庄三郎 “芸術的精神の教育的汎濫 一所謂自由教育思潮について”（『闡明』第8号、1921年6月）
- (6) 石戸谷哲夫『日本教員史研究』（1967年、講談社）
- (7) 『下中弥三郎事典』（1965年、平凡社）によると、『闡明会』という紹介記事が『啓明』に掲載された。「高知県高岡郡久乳町上加江町を中心に同じく少壮有為の教育者によつて組織せられてある会で、平田寛君、宮地定晴君、岡田遊亀君等が主脳者である。平田君からの来信によつて同会の活動の有様も伺はれる。同会の人達が我が啓明会に多数御入会下さつたのを喜ぶ」とあるのがそれである。この記事のなかに記されている宮地と岡田は『闡明』誌上に発表された会員名簿にみられる名であり、おそらく上田庄三郎らの『闡明会』と同一団体であろう。
- (8) 『闡明』第3・4号（1920年9月合併号）に発表された「綱領・規約」はつぎのとおり。

#### 綱 領

教育の進歩に有害にして時代の大勢に逆行する頑冥思想を撲滅すること。

教育の高貴を中外に闡明し我等教育者の生活を強固充実ならしむること。

青年教育者の輿論を闡明し教育界に生新自由の気魄を促進すること。

#### 規 約

本会の主義に賛同するものによりて成立す。

特に会長を置かず、会員は平等の権利を有す。

活動の機関として係を置き必要に応じて選定す。

入会・退会は人格的自由。

毎月雑誌『闡明』を発行し吾等の主義を宣伝す。

時々教育界の新進教育学者を聘して講演会を開く。

なお、「規約」中、後二項目（機関誌発行、講演会）については、1920年4月以降に追加されたものと推察される。

- (9) 上田庄三郎 “教育は教育するものの手”（『上田庄三郎著作集第二巻教育のための戦い』1977年2月、国土社。論文は、1928年3月『教育新潮』誌上に発表された）
- (10) 上田庄三郎『教育のための戦い』による。
- (11) 薫風 “団結すべし”（『闡明』創刊号、1920年7月）薫風とはペンネーム。本名は森三千枝。
- (12) 上田庄三郎 “闡明会のところ”（国分一太郎編『石をもて追われるごとく』1956年、英宝社）
- (13) 拙稿 “大正期教員サークル機関誌『闡明』・『地軸』総目次、解題”（『教育運動史研究』第16号、1974年）を参照されたい。『闡明』誌は、創刊号（1920年7月）以下、第2号（7月）、第3・4号（9月合併号、編集は本号だけ西山順一）、第5号（10月）、第6号（12月）、第7号（1921年1月）、第8号（6月）の計7冊が刊行された。なお、会

員たちの論稿は、当初そのほとんどが発表者自身の手でガリ切りがされている。

- (14) 西岳山人 " 寝言(一) " (『闡明』第6号)西岳山人、本名は田村信吉。このころ会費納入の状況は、会員35名中15名、ほかに寄附が若干あったことが編集子の手で記されている。
- (15) 超風生 " 母の膝下より " (『闡明』第3・4号)、超風生とは上田庄三郎のペンネーム。上田は同論稿において、弾圧左遷人事の張本人である徳弘視学の死に際して、「その死を惜しむ涙ではなくして、衷心おしむことの出来ないことをかなしむ涙」を流すような自己こそが「撲滅」さるべき「頑冥思想」であり、ひっきょう、「頑冥思想とは自己自身だと答へたい」と述べている。なお、こうした発想は他の会員のなかにも受け入れられている。たとえば、紫哉 " 闡明会モットー批判 " (『闡明』第5号)鉄舟生 " 年頭所感 " (『闡明』第7号)などは、規約綱領や活動に対する批判を展開している。
- (16) 田村西岳 " 寝言 " (『闡明』第2号)
- (17) ここで、彼らは教師をどのように規定していたのかを見てみよう。たとえば『闡明』創刊号には次のように示されている。
- 「1. 教育者は自ら自分の力をはっきり信ぜねばならぬ。 1. 教育者は須く人格的理想主義者たれ。 1. 教育者は又一面に於て教育即生活論の高唱者でなければならぬ。 1. 教育者は常に形式打破の頭を働かしておらねばならない。 1. 教育者はもつと教育の原理、理論に親しみ教授の背景は、常に自己の内心から□□に湧き出した人格を以つてしなければなりません」(宮地三舎 " 現代教育改善の基調 "、宮地三舎とは宮地定晴のことである)
- (18) 超風 " 創生 " (『闡明』第2号)
- (19) 上田庄三郎 " 教育のための戦い " (上田庄三郎著作集第2巻所収)による。
- (20) 栖霞生(沖良貞) " 潮の色表はれたり " (『闡明』創刊号)
- (21) " 編輯余感 " (『闡明』創刊号)
- (22) 横山山比子(横山オ一) " 借りの巢から " (『鳥瞰』第10号、1922年6月号)SNK協会については中内敏夫『生活綴方成立史研究』(1970年、明治図書)、津野松生『小砂丘忠義と生活綴方』(1975年、百合出版)に詳しい。
- (23) 清原駿一郎 " 九州地より " (『闡明』第8号)
- (24) 超風 " 創生 " (『闡明』第2号)
- (25) 上田超風原 " 個性の主角に生きたい " (『闡明』第7号)、同論稿では「自分の創生生活の唯一の懸念は自分の思想がどれだけ厳密に自分の生活を制御するか、どれだけ独自に自分といふ一人に即するかだけが、問題として迫ってくる」とある。
- (26) 『土』創刊号の編集の " あとがき " に「『せんめい』よりもより真実な意味で教育雑誌だと思ひます」とある。なお、すでに彼は、「教育は純然たる愛の活動である点に於て真の芸術と本質の握手をなすべきものであった」(" 芸術的精神の教育的汎濫。所謂自由教育思潮について" 既出)と、芸術活動にこそむかうべきものがあることを、述べていた。『土』は、編集発行人上田庄三郎、発行所高知県三崎村189愛土社、創刊号発行部数40部、謄写刷り。



隔月発行で出発した。同人は当初24名。闡明会残党が数名加わっている。誌名は闡明会員黒岩正一がつけた。第5号(1922年3月)を迎える頃になると、同人48名と倍増した。その範囲は、幡多郡内、大分、大阪、東京、香川、愛媛そして高知県高岡郡と広く、職種も、教師・商店主・僧侶など。

- (27) 上田庄三郎 # 混沌を行く" (『土』創刊号)
- (28) 上田の回想によれば、講師謝礼は三崎下川口聯合教育会より支払われたということである(上田 # 闡明会のこと")。
- (29) 清原駿一郎 # 闡明会会員諸君に" (『闡明』第2号)
- (30) 『闡明』創刊号より
- (31) もくせい子(西山順一)# 日記から" (『闡明』第3・4号)
- (32) 上田庄三郎 # 夏" (『土』創刊号)
- (33) 佐田篠山 # 稲毛氏の哲学から" (『鳥瞰』第3号、1921年1月21号)
- (34) 子規(山脇義清)# 講習会よりかへりて" (『闡明』第3・4号)
- (35) 幸原峽花 # 幡多郡主催講習会に与ふ" (『闡明』第3・4号)
- (36) もくせい子 # 日記から"
- (37) 『闡明』第7号、『闡明』第2号ほか。

なお、本論文は次の構成からなる。

はじめに

序章 生活綴方運動の成立をめぐる

第1章 新興教育運動をめぐる

1. 啓明会再建運動

2. 『教育戦線』(自由社)の出版 (以上『人文科教育研究』I)

第2章 生活綴方理論の成立

第1節 大正自由教育運動の展開

1. 新しい教師像の形成 (以上、本誌)

2. 新しい児童観—自由教育実践について

第2節 生活綴方理論の成立

第3章 生活綴方運動のとりくみ = 「調べた綴方」論の展開=

終章 結語

(かわぐち ゆきひろ・埼玉大学教育学部)